

日本語・日本事情の授業と学生の状況

上 條 厚

1. はじめに

筆者は信州大学において、学部外国人留学生の日本語・日本事情の授業を担当している。その授業に関して、アンケート結果に基づいて述べる。以下に述べるのは筆者の授業のことであるが、大学における外国人留学生の学習にかかわる一端を示すものであり、外国人留学生の指導全般においても参考になると考える。(アンケートに基づいて述べた後、別の事項を付随的に述べる)

信州大学の学生数は2006年5月1日現在 11,774名、外国人留学生は 348名であり、その内学部生は 181名である。信州大学では外国人留学生の日本語能力向上と日本理解のために各種授業を開講しているが、学部生対象には日本語・日本事情を開講している。その概要は次のとおりである。

日本語は「日本語(読解)」「日本語(作文)」「日本語(発表)」があり、それぞれ前期にⅠ、後期にⅡを開講している。学生はこれらすべてを受講することができる。それぞれ週2コマずつあるが、受講する学生は2コマの内のいずれか1つに出席する。日本事情は前期と後期、3コマずつ開講している。学生はすべてを受講することができる。日本語・日本事情を受講するのはほとんどが入学したばかりの1年生であるが、2年生以上の受講もある。これらの単位の扱いについては、学部・学科により異なる。すべての学部・学科が日本語・日本事情の一定単位数を卒業単位に振り替えられるとしているが、学部・学科によりその単位数は異なる。また一定の単位数を必修としている学部もある。このようなわけで、学部生の全員が一律に日本語・日本事情の授業を受講するわけではない。

筆者はこれらの授業の内、「日本語(読解)」「日本語(作文)」の全部と、日本事情の前期・後期1コマずつを担当している。

2. 授業アンケートについて

授業は、常により良いものを求めて努力しなければならない。授業がはたし

て学生の役に立っているか、学生は授業に満足しているか、内容はこれで良いかなどなど、常に考えていかなければならない。

筆者は受講生に対してアンケートを行っている。以下、筆者の担当している授業について、06年度後期の授業終了時に行ったアンケートに基づいて述べる。このアンケートは授業の内容に関することを中心に聞いているものであり、それぞれの授業ごとに行った。後出の表に示すものがその内容と結果である。表1—「日本語(読解)」、表2—「日本語(作文)」、表3—日本事情である。

次にこの3つのアンケートについて、すべてに共通することを述べておく。3つのアンケートは同じ形式にそろえてあり、以下のことが全部のアンケートに共通している。

質問項目は後出の各表の1～8のごとくである。回答は「非常にそう思う」「少しそう思う」「普通」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」「分からない」から選ぶようにした。各表では簡略化して、「非常に」「少し」「普通」「あまり」「全然」としてある。「分からない」の回答は1つもなかったので、表では省略する。なお表には示さないが、アンケートの最後に自由記述の欄を設けた。

質問項目の1は、授業が役に立ったかどうかには関係なく、日本語能力あるいは日本理解が、入学した時点と比べて向上したと思うかを聞いている。

質問項目の2は、授業が日本語能力の向上に、あるいは日本に関する理解に、役に立ったと思うかを聞いている。

質問項目の3は、授業を受けて自分自身が満足したかを聞いている。

質問項目の4～7は、授業の内容に関する質問である。ただし授業の内容全部についてではなく、主要なものについて聞いている。

質問項目の8は、授業全般にかかわることの質問である。

この後に項目の9があり、感想・要望などの自由記述であった。

このようなアンケートである。次にそれぞれの授業ごとに見ていく。「日本語(読解)」についてはある程度詳しく見る。それ以外は手短かに見る。

3. 日本語(読解)

表1 日本語(読解)授業アンケート 結果

| 質問項目 | 表のとおり | 回答数 | 19 | 上段 | 実数 | 下段 | 百分率 |
|------|-------------------|-----|----|----|----|----|-----|
| | 「非常にそう思う」→「非常に」 | | | | | | |
| | 「少しそう思う」→「少し」 | | | | | | |
| | 「普通」→「普通」 | | | | | | |
| | 「あまりそう思わない」→「あまり」 | | | | | | |
| | 「全然そう思わない」→「全然」 | | | | | | |

| | 非常に | 少し | 普通 | あまり | 全然 |
|--|------------|------------|-----------|-----------|----------|
| 1. 4月に入学した時と現在と比べて、日本語を読む能力は向上したと思うか。(この授業が役に立ったかどうかには関係なく) | 6 31.6 | 8 42.1 | 3 15.8 | 2 10.5 | 0 0.0 |
| 2. この授業は日本語の読む能力を向上させるのに、役に立ったと思うか。 | 5 26.3 | 9 47.4 | 4 21.1 | 1 5.3 | 0 0.0 |
| 3. この授業に出て、自分自身、満足したと思うか。(授業が日本語能力向上の役に立ったかどうかには関係なく) | 6 31.6 | 7 36.8 | 3 15.8 | 2 10.5 | 1 5.3 |
| 4. この授業では俳句・短歌を扱った。これは良かったと思うか。 | 9 47.4 | 6 31.6 | 3 15.8 | 1 5.3 | 0 0.0 |
| 5. この授業ではニュース(「竜巻」「津波」)を扱った。これは良かったと思うか。 | 15 78.9 | 2 10.5 | 1 5.3 | 1 5.3 | 0 0.0 |
| 6. この授業では小説(「蜘蛛の糸」)を読んだ。これは良かったと思うか。 | 8 42.1 | 9 47.4 | 2 10.5 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 7. この授業では「長野県の広がり」を読んだ。これは良かったと思うか。 | 7 36.8 | 10 52.6 | 2 10.5 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 8. この授業は、「長野県の広がり」を読むことを始めとして、授業の内容が日本事情の授業のようになっている。これは良いことだと思うか。 | 8 42.1 | 7 36.8 | 3 15.8 | 1 5.3 | 0 0.0 |

まず「日本語(読解)」について、それぞれの質問項目について見る。

項目 1

受講者の中には「日本語を長く勉強しているが、能力が全然伸びない」などのようなことを言う人がいる。実際、語学は、学習がある程度の段階まで達すると、そこから先はなかなか伸びないと感ずる人がよくいるようである。そうしたこともあり、項目 1 の質問を設けた。これはこの授業が役に立ったかどうかには関係なく、自分自身日本語を読む能力が向上したと思うかを聞いたものである。今回の受講者は全員 1 年生であったので、質問文を「4月に入学した時と比べて」とした。2 年生以上がいれば別の聞き方をするとところである。結果は「非常にそう思う」が 31.6%、「少しそう思う」が 42.1%である。「非常に」と「少し」を合わせると 73.7%になる。したがって相当多くの学生が、入学後の 1 年の間に読む能力が向上したと考えているということである。このアンケートの対象は学部生であり、日本語で行われる授業に出席し、日本人と

交わっている人たちである。そういう人たちだから、このように自分自身日本語を読む能力が向上したと感じられるのであろう。ただし「普通」15.8%、「あまりそう思わない」10.5%もあり、向上したと感じていない学生もいるのである。

項目2

これはこの授業が役に立ったと思うかを聞いたものである。「非常に思う」26.3%と「少し思う」47.4%を合わせると73.7%であり、高率と言える。ただし「非常に思う」26.3%の方は「少し思う」47.4%よりも相当低い。両方合わせれば高率になるから良いとは言えるが、この「非常に思う」の低さは留意すべきである。これについては、他の授業(後述)の同じ項目(この授業と同じ質問をしている)に対する回答と比べてみても、相当に低くなっている。以下に見る個々の項目では「非常に思う」が大分高率であるが、ここでは低い。その理由として思い当たることは、この授業が読むことが中心であって、学生が受け身になることが多いことである。それは一つの要因として考えられるが、ほかにも原因があるかもしれない。こういう回答を受けたことを1つの契機として、よりよい授業にすべく考慮すべきであろう。

項目3

これはこの授業に出て自分自身が満足したかを聞いたものである。「あまりそう思わない」10.5%、「全然そう思わない」5.3%の回答があり、学生たちの正直な気持ちを表していると言えよう。「非常に思う」31.6%、「少し思う」36.8%の方は合わせて68.4%であるから、おおむね良いと言えよう。なお満足ということで注意しなければならないことは、学生の満足する授業が常に良い授業だとはかぎらないことである。学生が満足するか否かにかかわりなく、扱うべきものは扱わなければならない。しかし満足ということを念頭に置くことは重要である。「全然そう思わない」の回答があることは、よく心すべきである。すべての学生にやる気を起こさせ、さらに満足させ、かつ内容の濃い授業を目指したいものである。

項目4

質問項目の4からが授業の内容についての質問である。この授業では俳句・短歌を扱っている。また川柳・狂歌も少し扱っている。そうするのは、俳句・短歌が日本の伝統的なものであるので、学生たちにもある程度触れさせようという考えからである。授業で毎回、1句(1首)か2句(2首)ずつ読んでいる。筆者が学生たちに分かるように説明するわけだが、とはいっても学生たちにとって相当に難しく面倒なものであり、はたして学生たちがこれを歓迎しているかどうか、非常に気になるところである。しかも授業で扱う俳句・短歌は古い

時代のものばかりで、現代語とは違う言い方も出て来る、さらには筆者が学生に与えるコピーは旧字旧かなで書いたもの、という具合である。このアンケートの結果は、「良かったと思うか」という質問に対して、「非常にそう思う」が 47.4%と高率である。「少しそう思う」を合わせると 78.9%(表の数値は四捨五入なので、合計では表の数値そのものの合計と異なる場合がある)であり、相当な高率と言ってよい。こういう結果であることはありがたい。日本の伝統的なものに触れることを、学生たちは良しとしているわけである。扱うのに意義があり、学生たちもそれを是認しているということである。なお当然のことながら、授業には工夫が必要である。学生の興味を引き出すようなやり方が必要であるが、それがうまくいっていると言えよう。

項目 5

この授業ではニュースを扱っている。ニュースの中で特に災害に関するものなど、緊急性を有するものを扱うことにしている。それは日本に住んでいる者にとっては、緊急時に日本語によるニュースを理解することが重要だからである。ニュースを扱うに当たっては、1年前やもっと前に報道されたものでは学習するのに興味がわかないと考える。古い報道でも学習に役立つものももちろんあるであろうが、この授業ではニュース学習のために使える時間は限られている。学生たちにとってできるだけ学習意欲がわくものだけを使いたい。それで報道されたばかりのものを使うことにしている。当然、そういうニュースがいつあるかは分からないので、授業で扱う時期は一定していない。扱うに足るニュースがあれば、すぐに扱う。新聞記事を読解することと、音声によるニュースを聴解することとを適宜行っている。授業には、テレビニュースを編集したビデオと新聞記事のコピーを、たいてい用意している。

06年度後期はその1回目に、2006年11月7日(火)の北海道での竜巻のニュースを扱った。この授業は木曜日と金曜日にあるので、そのニュースの2日後と3日後が最も近い日であったが、それに間に合わせて教材を作成して授業を行った。そうしたところ次の週、11月15日(水)にまた北海道で津波のニュースがあった。夜のニュースを見て次の日の朝すぐに授業であったが、それも何とか間に合わせて授業をした。こうして2週間連続でニュースの学習をする結果となった。

さてこれに関して、アンケートで「良かったと思うか」と聞いた回答の結果は、「非常にそう思う」が 78.9%であった。これは筆者も驚く高率であった。「少しそう思う」を合わせると 89.5%となる。ニュース性あるものを扱うことの重要性を感じる次第である。こうしたニュースを学習することは重要であり、学生もそれを認識していると言えよう。

ついでながら言っておくと、今回扱ったニュースには出て来なかったが、06年度の前期に扱ったものには出て来たとし、筆者が扱うニュースにはよく出て来るが、「運転を見合わせる」という言い方がある。これまでの筆者の経験では、この「見合わせる」の意味を知らない学生が多い。筆者の授業に出て初めて知るといふ人がほとんどである。重要な語であるが、大学の学部に入學するだけの日本語能力がある者にしてこういう状況にあることを、指摘しておきたい。

項目 6

この授業では「蜘蛛の糸」(芥川龍之介の小説)を読んだ。これを扱ったのは、これが日本の小説として非常に有名なものであることと、短くてすぐに読めるということからである。ただしいくら有名でありまた興味ある内容のものであっても、これを読むことが日本語能力向上の役に立つかということ、日常生活の日本語に関してはあまり望めないであろう。日常生活にはない所を舞台とした小説であり、普通の生活に関係あることばはあまり出て来ないからである。このようなわけで、これを読むことを学生がどう思っているかは関心のあるところである。さてアンケートの結果、「良かったと思うか」と聞く質問に対する回答は、「あまりそう思わない」「全然そう思わない」が全然なかった。他の質問項目への回答ではそれが若干あるにもかかわらずである。これは注目すべきことである。「非常にそう思う」は 42.1%、「少しそう思う」は 47.4%、合わせて 89.5%であり、高率である。面白い日本の小説を読むことが好まれているという結果である。学生が興味を示し、なおかつ日本語能力向上の役に立つものを、できるだけ教材として取り入れていきたいものである。

項目 7

この授業では「長野県の広がり」という文を読んでいる。それは『県歌信濃の国』(市川健夫・小林英一編著 銀河書房 1984年)という単行本の一部であり、長野県の広いことや高峰の多い自然を、誇らしく述べたものである。長野県のことを手短かに紹介するのに適当な文であり、授業に使用している。ただし原文の明らかな間違いや、町村合併が進んだ現在の状況に合わない部分を、筆者が修正して教材としている。項目 7は、この文を読んだことを「良かったと思うか」と聞いているものであるが、項目 6と同様、「あまりそう思わない」「全然そう思わない」が全然なかった。「非常にそう思う」は 36.8%で若干低いものの、それに「少しそう思う」52.6%を合わせると 89.5%であり、項目 5・項目 6と同率である。身近なことを書いた文を読みながら日本語学習ができることを、学生たちは良いと考えていると言えよう。この文も授業で扱うのに適当なものである。

項目 8

筆者の日本語の授業は、日本事情の授業のような内容になりがちである。項目7での教材「長野県の広がり」は、内容そのものが日本事情であるが、そういう教材でない場合でも、折に触れて日本のことを話題として話している。特に俳句・短歌・小説などを扱うときには、そうなりがちである。そのようにするのは、日本語の勉強のためには日本をよく知ることが大切だと考えるからである。項目8は、このように筆者の授業が、日本語の授業でありながら日本事情の授業のような内容になりがちであることを、「良いことだと思うか」と聞いたものである。結果は「非常にそう思う」42.1%、「少しそう思う」36.8%であり、合わせて78.9%である。項目5～7ほど高率ではないが、高率の方だと言うことができよう。日本事情の授業のような内容になることを、学生たちは良しとしているわけである。したがって今後もこの方向性を続けるべきである。学生にとって役に立つ日本に関する諸々の知識を、より多く伝えていくべきである。

4. 日本語(作文)

表2 日本語(作文)授業アンケート結果

質問項目 表のとおり 回答数 15 上段 実数 下段 百分率
「非常にそう思う」→「非常に」 「少しそう思う」→「少し」 「普通」→「普通」
「あまりそう思わない」→「あまり」 「全然そう思わない」→「全然」

| | 非常に | 少し | 普通 | あまり | 全然 |
|---|------------|-----------|-----------|----------|----------|
| 1. 4月に入学した時と現在と比べて、日本語を書く能力は向上したと思うか。(この授業が役に立ったかどうかには関係なく) | 7 46.7 | 7 46.7 | 1 6.7 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 2. この授業は日本語の書く能力を向上させるのに、役に立ったと思うか。 | 6 40.0 | 7 46.7 | 2 13.3 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 3. この授業に出て、自分自身、満足したと思うか。(授業が日本語能力向上の役に立ったかどうかには関係なく) | 9 60.0 | 3 20.0 | 3 20.0 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 4. この授業では漢字の練習をした。これは役に立ったと思うか。 | 10 66.7 | 5 33.3 | 0 0.0 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 5. この授業では「実りの秋」「年末年始」の作文練習をした。これは良かったと思うか。 | 11 73.3 | 3 20.0 | 1 6.7 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 6. この授業では「とっても不思議」「寒さに適応した動 | 8 | 3 | 4 | 0 | 0 |

| | | | | | |
|---|------------|-----------|-----------|----------|----------|
| 物たち」の要約練習をした。これは良かったと思うか。 | 53.3 | 20.0 | 26.7 | 0.0 | 0.0 |
| 7. この授業では小論文を書く練習をした。これは良かったと思うか。 | 10 66.7 | 3 20.0 | 2 13.3 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 8. この授業では、時間がかかっても全員の作文を読むようにした。これは良いことだと思うか。 | 11 73.3 | 2 13.3 | 2 13.3 | 0 0.0 | 0 0.0 |

次に「日本語(作文)」について見る。

表2を見てまず言えることは、「あまりそう思わない」と「全然そう思わない」の回答がないことである。表1の「日本語(読解)」と表3の日本事情には、それが少しある。それほどこの「日本語(作文)」の授業が良かったということであろう。先に述べたようにこの授業は2コマ開講があり、学生はどちらかに出席しているわけであるが、この期の授業はどちらの方も、学生の欠席も少なく、授業に集中しない者もなく、うまく行えたと筆者は感じている。そのこととアンケートの回答とは関連していると考えられよう。

次にそれぞれの質問項目について見るが、以下では手短かに述べる。

項目1

これは「日本語(読解)」の質問項目と同様に聞いているものであるが、ここでは書く能力について向上したと思うか聞いている。「非常にそう思う」「少しそう思う」どちらも46.7%で、合わせて93.3%である。圧倒的多数が書く能力が向上したと考えている。

項目2

この授業が役に立ったと思うか聞いているが、「非常にそう思う」40.0%、「少しそう思う」46.7%、合わせて86.7%である。これは表1の「日本語(読解)」の回答(73.3%)よりも高くなっている。「日本語(作文)」の授業では作業をすることが多く、それで実際に役に立った、あるいは役に立ったという実感が強いということではないかと想像される。

項目3

満足したと思うか聞いているが、「非常にそう思う」が60.0%と高率である。「少しそう思う」20.0%と合わせると80.0%である。前項と同様、自ら作業をすることにより、満足感も大きくなったのであろう。

項目4

学生たちは入学前に常用漢字をほとんど勉強してあるはずであるが、この授業では常用漢字を一通りすべて練習するようにしている。授業は、単調にならないように、学生の興味を引き出すように工夫し、重要なことが定着するよう

に考えてやっているが、一度学習した漢字を再度学習することを学生たちがどう思っているか、気になるところである。不要だという意見もありそうである。アンケートの結果は、役に立ったと思うかという質問に対し、「非常にそう思う」が 66.7%になっている。それ以外は「少しそう思う」33.3%であり、この2つで 100%である。筆者も驚くくらいである。学生たちは漢字の練習を、このように有益と思っているのである。今後も、さらに工夫を重ねて、続けていくべきことである。

項目 5

題を与えての作文練習について、良かったと思うか聞いている。「非常にそう思う」が 73.3%と高率である。非常に高率と言ってよい。「少しそう思う」20.0%と合わせると 93.3%になる。これほどに良く感じているわけである。作文の内容は自分たち自身のことを書かせている。また書いたものは皆の前で発表させている。

項目 6

要約練習について良かったと思うか聞いている。「非常にそう思う」53.3%は低率というほどではないが、他の項目に比べれば低くなっている。「少しそう思う」20.0%と合わせても他の項目に比べて低く、その分「普通」が多くなっている。授業内容が悪いということではないだろうが、考慮の余地もあるであろう。

項目 7

小論文の練習について良かったと思うか聞いているが、「非常にそう思う」が 66.7%と高率である。「少しそう思う」20.0%と合わせると 86.7%である。学生にとって文を書くことは必要であり、練習を歓迎しているわけである。この授業のアンケートの自由記述欄に「もっと小論文の練習をすべきだ」などの意見が大分あった。できるだけ多くすべきものだと思う。もっとも「宿題が多すぎる」という意見もあった。なお今回の授業で学生の書いた小論文について言うと、例年に比べて良いものが少ないと感じた。時間の制約もあり、それ書き直させる指導ができなかった。時間配分ならびに指導法をよく考えるべきであろう。書く練習は、項目 5 の作文練習を含めて、充実させていくべきである。

項目 8

学生の書いたものは、できるだけ授業中に読んで発表させるようにしている。そうすれば時間がかかるわけだが、そうすることが「良いことだと思うか」を、この項目では聞いている。回答は「非常にそう思う」が 73.3%と、非常に高率である。「少しそう思う」13.3%と合わせると 86.7%である。このように発表することを良しとする回答である。皆の前で発表をすることは話す練習とな

り、有益なことである。また学生たちにとって自分が発表する機会が与えられることはうれしいことであるだろう。各自が発表することは、有益にしかつ学生の望むことだと言える。

5. 日本事情(長野県の自然環境と人間)

表3 日本事情(長野県の自然環境と人間)授業アンケート 結果

質問項目 表のとおり 回答数 21 上段 実数 下段 百分率
「非常にそう思う」→「非常に」 「少しそう思う」→「少し」 「普通」→「普通」
「あまりそう思わない」→「あまり」 「全然そう思わない」→「全然」

| | 非常に | 少し | 普通 | あまり | 全然 |
|---|------------|-----------|-----------|----------|----------|
| 1. 入学した時と現在と比べてみて、日本に関してよく理解するようになったと思うか。(この授業が役に立ったかどうかには関係なく) | 10 47.6 | 8 38.1 | 2 9.5 | 1 4.8 | 0 0.0 |
| 2. この授業は日本に関して理解するのに、役に立ったと思うか。 | 11 52.4 | 7 33.3 | 2 9.5 | 1 4.8 | 0 0.0 |
| 3. この授業に出て、自分自身、満足したと思うか。(授業が日本理解の役に立ったかどうかには関係なく) | 9 42.9 | 8 38.1 | 4 19.0 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 4. この授業では植物や自然環境に関することを扱った。これは良かったと思うか。 | 8 38.1 | 8 38.1 | 3 14.3 | 2 9.5 | 0 0.0 |
| 5. この授業では雨量指数・積算温度を扱った。これは役に立ったと思うか。 | 5 23.8 | 7 33.3 | 9 42.9 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| 6. この授業では歴史(古い時代だけだったが)の話をした。これは良かったと思うか。 | 15 71.4 | 3 14.3 | 2 9.5 | 1 4.8 | 0 0.0 |
| 7. この授業では建物に関する話を話した。これは良かったと思うか。 | 8 38.1 | 7 33.3 | 4 19.0 | 1 4.8 | 1 4.8 |
| 8. この授業では映像を多く使った。映像を見るのに時間を使いすぎると、その分、話す時間が少なくなる。それでも理解しやすくするために映像を多く使った。これは良いことだと思うか。 | 13 61.9 | 4 19.0 | 4 19.0 | 0 0.0 | 0 0.0 |

次に日本事情について見る。筆者の06年度後期の日本事情は「日本事情(長野県の自然環境と人間)」という名称である。アンケートの結果は全般的に良

好と言える。それぞれの質問項目について見る。

項目 1

これは「日本語(読解)」「日本語(作文)」で日本語能力が向上したと思うか聞いたのと同様に、日本理解について向上したと思うかを聞いている。この授業は2年生以上の受講者もいたので、「入学した時と現在と比べてみて」という言い方で質問した。回答は「非常にそう思う」47.6%、「少しそう思う」38.1%で、合わせて85.7%である。このように日本理解に関しても、圧倒的多数がよく理解するようになったと考えている。

項目 2

この授業が役に立ったと思うか聞いているが、「非常にそう思う」が52.4%である。同じ質問で別の授業での回答は「日本語(読解)」26.3%、「日本語(作文)」40.0%であり、それよりも高い。この授業では聞いているだけでも理解ができるので、このような結果になったのであろうか。「少しそう思う」33.3%と合わせると86.7%になる。

項目 3

満足したと思うか聞いているが、「非常にそう思う」42.9%と「少しそう思う」38.1%を合わせると81.0%である。2つの合計は「日本語(読解)」では68.4%、「日本語(作文)」では80.0%であり、「日本語(読解)」よりも高く、「日本語(作文)」とは同じくらいである。

項目 4

この授業では筆者以外の2人の先生に、5回講義をしていただいている。その時間には植物や自然環境のことを扱っており、それに関連することは別の時間にも筆者が補足的に述べている。この項目はそれが良かったと思うか聞く質問である。「非常にそう思う」「少しそう思う」共に38.1%で、合わせて76.2%であり、高率と言える。

項目 5

前項のように、この授業では植物や自然環境のことを扱っているが、それに関連して温室指数と積算温度が出て来る。その説明を授業中にし、指定された都市について計算することを宿題として課している。この宿題については1回で正解となる学生は少ない。正解でなければ正解となるまで、何回でも計算し直して提出させるようにしている。この項目はその学習が役に立ったと思うか聞いている。「非常にそう思う」は23.8%で、低率である。「少しそう思う」33.3%と合わせても57.1%で、高率とは言えない。役に立ったと思う学生が多くないという結果である。そうかといって、扱わないで済ますわけにはいかないが、やり方の工夫が必要かもしれない。

項目 6

この授業では時間の許す限り歴史のことを話している。それが良かったと思うか聞いている。「非常にそう思う」が 71.4%であり、高率である。「少しそう思う」14.3%と合わせると 85.7%である。歴史の話はこのように歓迎されているわけである。筆者が話す内容は、古いことであっても現代日本を理解するための常識となっていることばかりであり、学生たちが知っていれば役に立つものである。さらに充実した内容にしたいと考える。

項目 7

前項の歴史と関連して、建物に関することを話している。それが良かったと思うか聞いている。回答は「非常にそう思う」が 38.1%、「少しそう思う」が 33.3%、合わせて 71.4%であり、高率の方ではあるが、前項に比べると低い。歴史ほどは人気がないようである。もう少し工夫して話すべきであろうか。

項目 8

この授業では映像を多く使っている。それは効果的なことである。ただし映像を使う時間があまり多くなると、講義の内容が少ないものになってしまう。そこでこの項目は、映像を多く使うことを良いと思うか聞いたものである。「非常にそう思う」は 61.9%で、高率である。「少しそう思う」19.0%と合わせると 81.0%である。このように高率である。ただしそれ以外に「普通」の回答が 19.0%あることも無視してはなるまい。そうしたことも考慮した上で、より効果的な方法にしていくべきであろう。

6. ここまでのまとめ

以上、アンケートに基づいて述べた。

日本語能力および日本に対する理解については、授業が役に立ったかどうかには関係なく、向上したと考える学生が多いことが分かった。

筆者の授業が役に立ったか、満足したかについては、そう思うという回答の率が高かった。

筆者の授業の内容に関しては、おおむね良いと言える結果であるが、良いと思う回答の率が低いものについては、筆者自身が考慮すべく思われる部分もある。

アンケート結果から言えることはこのようなことである。アンケートを通して、学生たちの歓迎すること、歓迎しないことが、大分見えたように思う。結果を参考としてさらに良い授業にしたいものである。

7. 付け足し

次に、ここまで述べたこととは直接関係ないことであるが、外国人留学生にかかわる重要なことなので付随して述べておきたい事項があり、以下に書く。

<1>英語未履修者のこと

その1つは、外国人留学生の中の英語未履修者のことである。

学部生の中で本学に入学の時点で英語が未履修である者、あるいは未履修に近い者が若干名いる。このことは留意しておくべきであろう。06年度入学者の中で未履修であった1名の例では、最初がんばって英語の授業に出たが、結局続かなかったということがある。

最近5年間の学部入学者で、入学時点で英語学習3年未満の学生の数を挙げると、次のとおりである。なおこれは、筆者の授業に出てアンケートに答えた学生についての数である。筆者の授業に出ない学生もあり、その分に関する資料を筆者は持っていない。

| | | |
|-----|----------------|----------------------|
| 02年 | 2年—1(中国) | 0年—4(中国。内朝鮮系2) |
| 03年 | 1年—3(中国。内朝鮮系2) | 0年—1(中国。朝鮮系) |
| 04年 | 2年—2(中国) | 0年—2(中国。朝鮮系2) |
| 05年 | 2年—1(ベトナム) | 0年—2(中国。朝鮮系1、モンゴル系1) |
| 06年 | 2年—1(モンゴル) | 1年—2(中国。朝鮮系1、モンゴル系1) |
| | 0年—2(中国) | |

このように毎年若干名、英語未履修、あるいは未履修に近い者の入学がある。06年度入学者について、履修にかかわる状況を分かる範囲で示すと次のとおりである。

2年履修のモンゴル学生— 高校が2年間であり、その期間学習した。(なお現在ではモンゴル国の学制は、高校が3年間に延長されている)

1年履修の朝鮮系中国学生— 高校卒業まで英語を学習しなかった。日本語学校で1年間学習した。中学・高校では外国語の中で英語か日本語が選ばれたが、日本語を選んだ。

1年履修のモンゴル系中国学生— 高校で1年間学習したが、中国での大学入試に必要ないのでやめた。

履修なしの中国学生(上記の2人とも同じ状況)― 高校で外国語の中で英語か日本語を選べたが、日本語を選んだ。

中華人民共和国の学生については、未履修者に少数民族系の学生が目立つ。少数民族系学校では教科において、外国語の1つが漢語である。そのため英語の履修が少ないということがある。ただし未履修者は少数民族系だけではない。

学生の中に英語未履修者がある程度いることは、留意しておくべきであろう。

<2> 中華人民共和国のある学校の卒業者について

最近入学する学部生の中で、中華人民共和国のある学校の卒業者が多くなっている。そのことについて述べる。なおこれは状況として述べるものであり、他意はないことを断っておく。国名については伏せたとしても、学生の数からすぐに分かることであるから、書いておくことにする。

その学校はA校としておこう。筆者が持っている95年以降のアンケートでは、02年度からA校卒業者の入学がある。このアンケートは、筆者の授業に出てアンケートに答えた学生の分のみであり、それ以外の学生のことは把握していない。このアンケートによると、学部外国人留学生の年度別入学者数とその内のA校卒業者の数は次のとおりである。

| | A校 | 全体 |
|-----|----|----|
| 02年 | 4 | 44 |
| 03年 | 5 | 47 |
| 04年 | 13 | 47 |
| 05年 | 10 | 37 |
| 06年 | 13 | 38 |

01年以前にはA校からの入学はない。ただし00年の入学者にA校と似た名前の学校の修了者が1名あるが、その関連は不明である。上記の数に見られるように、06年には全体数の3分の1になっている。

A校の概略は次のとおりである。大都市にある中高一貫教育のエリート校であり、学年定員は140名。(年により変化はあるかもしれないが、ある年度のものとして述べておく)中学の時は自宅からの通学であるが、高校から全寮制となる。1日の授業時間は日本の学校で考えられるものよりも長く、また授業時間以外にも自習時間という形で学習時間が設けられている。土曜日は半日で

ある。このようにして勉強に力を入れている。

1 学年 140名の内 120名が、高校の時から日本語を学習する。3年間学習することになる。他の 20名は外国語は英語だけのようである。日本語を学習した者は卒業後(9月卒業である)来日し、日本語学校で学ぶ。その後、日本の大学を受験する。来日後数ヶ月で受験することになるが、ほとんどの人がどこかに進学する。

さてこのようなA校卒業生であるが、この人たちの中に優秀な者がいる半面、中にはなぜかやる気の感じられない者がいる。やる気の感じられない者はA校卒業生以外にもいるのだが、A校卒業生が目立つ。

単なる感触による話しでは主観に過ぎないので、まず出席に関する例を挙げる。

A校卒業生であり05年度入学のある学生は、05年度前期に筆者の「日本語(読解中心)Ⅰ」(05年度の名称)に受講票を出したが、わずかししか出席しなかった。後期には筆者の「日本語(読解中心)Ⅱ」「日本語(表現中心)Ⅱ」(いずれも05年度の名称)と日本事情に受講票を出したが、どの授業も出席したのは受講票を出した時だけで、後は出席がなかった。なおこの学生は後に除籍となった。

06年度入学のA校卒業生の中にも、同様な出席状況の者が2名いる。

次に成績について見る。06年度前期の成績について、次のように計算してみる。筆者の前期の日本語・日本事情は「日本語(読解)Ⅰ」と「日本語(作文)Ⅰ」が2コマずつ、日本事情が1コマである。学生は3つの授業を受講することができる。これらを受講した学生の中で、特別聴講生を除く一般の学部生について、延べ人数を計算し、与えた成績、優・良・可・不可の数を集計する。それを全学生についてとA校卒業生について行う。すると次のようになる。

| | 全学生 | 全学生での百分率 | A校卒業生 | A校卒業生内での百分率 |
|------|-----|----------|-------|-------------|
| 優の数 | 40 | 55.6 | 11 | 44.0 |
| 良の数 | 25 | 34.7 | 8 | 32.0 |
| 可の数 | 4 | 5.6 | 4 | 16.0 |
| 不可の数 | 3 | 4.2 | 2 | 8.0 |
| 計 | 72 | 100.0 | 25 | 100.0 |

この結果を見ると、優の数については、A校卒業生内での比率が学生全体の比率よりも低くなっていることが分かる。可と不可の数については逆に、A校卒業生内での比率が全体の比率よりも高くなっている。可の成績となったのは

A校卒業生だけである。なお可の数 4 の異なり人数は 3 である。このように A校卒業生は優が少なく、可と不可が多くなっており、成績が悪いと言える。以上は筆者の授業だけでの計算であるが、数値として見るとこのようになる。他の期の授業についても同様の集計ができるが、省略する。

なぜこのようなことになるのか。想像しかできないが、中学・高校の時に勉強以外のことは何も考えないほどすごく勉強して、その反動が大学生になってから出ているということが、理由の 1つとして考えられないだろうか。

このように述べたが、筆者には特定の学校やその卒業生を誹謗しようなどという気は毛頭ない。たまたま多く目に付く状態であったから、それを現象として述べたものである。日本や他の国においてもこういうことはあるであろう。状況を把握し、適切な指導をすべきである。

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2007年2月16日 採録決定